

# キム・ギウン——知られざる戦時中のモスクワ放送 日本語番組の朝鮮人スタッフ

島田 顕<sup>†</sup>

## KIM GI-UN: A Unknown Korean Staff of Moscow Radio Japanese Program Section in the Period of WWII

Akira Shimada

There was a Korean staff in the Moscow Radio Japanese Program Section in the period WWII. That name is KIM GI-UN. Recently, his historical personal documents were found in the Russian State Archive of Socio-Political History (RGASPI). When his documents were looked up, we understood he was a person with various backgrounds and history. Why did Korean KIM GI-UN become a Japanese Radio Program Section staff? Also what has become of him after the war? Whether he was purged or not after the war?

Purpose of this paper is to consider his activities from the situation of society in Soviet Union, the relation with the purge and the transition of the social movements in the World.

This paper consists of five sections: first, Summary of studies for the Radio Moscow and personal documents of KIM GI-UN; second, His personal history from his birth in Korea to the graduation of Institut of Oriental Studies in Moscow; third, Reasons and meanings of his position in the Publishing Company of Foreign Language Literatures, Party School of ECCI (Executive Committee of Communist International) in the Kushnarenkovo near the Ufa (capital of Republic of Bashkortostan) and Japanese Program Section of Moscow Radio; fourth, Influences of purges of his father and younger brother before the transfer of Korean people from Far Eastern District to Central Asia in the USSR in 1937; fifth, Generalization of study of Radio broadcasting of Japanese program to Japan and KIM GI-UN.

### 1. はじめに

1929年に開始されたソ連の国外向け放送であるモスクワ放送は、第二次世界大戦中の1942年4月に、モスクワのスタジオから日本語番組の放送を開始した。日本語番組放送開始当初の日本人職員は、翻訳者の野坂龍（日本共産党幹部野坂参三の妻）、片山やす（日本共産党指導者片山潜の娘）、アナウンサーのムヘンシャン＝緒方重臣だった（島田顕 2010, 2011, 2012）。特にアナウンサーは、1935年に南北樺太国境を越境する形で亡命した元女優の岡田嘉子を、第二次世界大戦後の1947年に迎え入れるまで、ムヘンシャン一人がつかとめることとなった。

ところで、ロシア人以外の日本語番組のスタッフとして、さらに二人の人物の名前が挙がっていた。二人とも朝鮮人で、一人はキム・ギウン、もう一人はミトという名前だった。キム・ギウンの名前は、

---

<sup>†</sup> 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員・関東学院大学経済学部講師

1941年12月16日にIKKI（コミンテルン執行委員会）のヴィルコフ（IKKI 人事部職員東方諸国担当）とプリーシェフスキー（IKKI 人事部専門員兼執行委員会機構党委員会書記）が疎開先のウファからコミンテルン書記長のディミトロフに宛てた書簡の中に記されていた。この書簡は日本語番組用ラジオ編集部（日本語課）創設に関するもので、ソ連国内での日本語放送に関する文書としては最初のものであった（RGASPI, f. 495, op. 74, d. 622, l. 55-56.; ВКП (б)... 2001: 706-710; 『資料集 コミンテルンと日本共産党』2014: 425）。文書では、プリーシェフスキー（編集長）、キム・シャン（編集員）[野坂龍のこど]、片山やす（アナウンサー）、キム・ギ・ウン（翻訳者）、ムヒンシャン（写字、書写）の名前が列挙され、これらの者たちから日本語編集部が編成されることが述べられていた。一方ミの名前は、ディミトロフの『日記』の1942年2月9日付の記述の中にあつた（Димитров 1997: 276; Dimitroff 2000: 482）。『日記』にディミトロフは、プリーシェフスキー、キム・シャン、ミ、フリードリフ（本名ゲミンデル、IKKI プレス・アジテーション部責任者）の名前を挙げ、短く「日本語ラジオ聴取を組織すること。日本に対するラジオ放送を準備するために（特別に）」と記していた（島田顕 2016b; 2016d）。これらの文書から上記の日本人たちに加えて朝鮮人が日本語編集部勤務していたことがわかった。ただし、キム・ギウンとミの名前はともに、同じ文書の中で挙げられていたわけではない。だから、別々の人物で名前が挙げられていたとも考えられるし、また同一人物で別表記とも考えられる。さらに両者はともに名前が挙げられているが、経歴も活動実績もわからなかった。

ミについてはいまだに不明なのだが、キム・ギウンについては、経歴、活動実績がつかめる可能性が出てきた。モスクワのRGASPI（ロシア国立社会政治史文書館、ルガスピ）に、「キム・ギウン」名の個人ファイル史料があることがわかり、モスクワで史料調査した結果、この個人ファイル史料の人物がまさに上記のキム・ギウンと同一人物であること、まさにこの人物が日本語放送開始当初のスタッフの一人だったことを確認することができた。

新たに見つかった史料をもとに、キム・ギウンとはどのような人物だったのか、どのような経歴をたどったのか、どのようにして日本語放送に関与したのかを明らかにしたい。特に、朝鮮語放送も同時期に開始されているのに、なぜ彼が日本語放送スタッフになったのか。さらには戦後はどうなったのか。特に粛清を免れたのかどうか。総じてプロパガンダの歴史から、朝鮮人である彼が日本語放送のスタッフとして活動した意味を考察したい。

## 2. 先行研究と史料

キム・ギウン、ミの名前はともに、上記の文書以外では見られない（ミについては後述する）。岡田嘉子の自伝、伝記、片山やすの自伝、伝記にも全く出てこない（岡田嘉子 1983; 1986; 1999; 工藤正治 1972; 升本喜年 1993; 平澤是曠 2000; 片山やす他 2009; Диванидова 2011）。長らく日本語課長を務めたリップマン・レーヴィンも、片山やすと開始当初の日本語放送についての文章を残しているが、やはり朝鮮人スタッフについては述べていない（レーヴィン 1997: 70-71）。唯一の先行研究として挙げることができるのは、前掲の史料集と日本語放送開始の経緯について述べた拙稿である（島田顕 2016b; 2016d; 2017c）。しかしながら史料集（特にその日本語版）には、キム・ギウンについての解説はない（『資料集 コミンテルンと日本共産党』2014: 425-426）。1944年に行われた日本語放送に対するモニタリング調査関連の史料でも、二人の名前は出ていない（島田顕 2017a）。

日本語放送の周辺の状況を知る文献では、戦争中のモスクワ放送について述べているズローヴィナ (Злобина 2009)、シマンチュークのものが詳しい (Симанчук 2004)。モスクワ放送以外の第二次世界大戦中のラジオ・プロパガンダ体制については、全体的な状況を述べたマグダーマツト他によるもの (マグダーマツト他 1988)、戦時中のソ連メディアの連携強化を扱った拙稿 (島田顕 2016a: 84-92) に加えて、モスクワ放送とは別にコミンテルンが開始した枢軸諸国向けプロパガンダ・ラジオ放送 (特別ラジオ放送) について述べたものがある (『コミンテルン小史』1969; 『コミンテルンの歴史』1973; マイエンブルク 1985; 島田顕 2017b)。

史料についてだが、キム・ギウンの個人文書は前述のようにルガスビで個人ファイル文書史料 (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590.) の形で保管されていたもので、文書史料には、1~21 枚目 (РГАСПИ И, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 1-21 об.) までの番号が付けられている。1 枚目はファイルの表紙で情報はない。2 枚目, 3 枚目, 5~8 枚目, 11 枚目, 12~13 枚目, 21 枚目には裏面があり、裏面を含めると全部で 31 枚である。時系列に並べると、9 枚目 (1939 年 6 月 5 日付) が一番古く、以下 19~20 枚目 (1939 年 6 月 9 日付), 5~8 枚目の表裏 (1940 年 5 月 22 日付), 10 枚目 (1940 年 7 月 6 日付), 16~17 枚目 (1942 年 2 月 26 日付), 4 枚目 (1942 年 2 月 28 日付), 12~13 枚目の表裏 (1942 年 11 月 30 日付), 14~15 枚目 (1942 年 12 月 1 日付) と 21 枚目表裏 (1942 年 12 月 1 日付), 11 枚目表裏 (1945 年 7 月 4 日付) と 3 枚目表裏 (1945 年 7 月 4 日付), 2 枚目表裏 (1945 年 11 月 16 日付) の順に新しくなっている。文書には、履歴書, 略歴書, 勤務評定, 写真付き履歴書, 履歴アンケート, 自伝履歴書, 弁明書, その他が含まれている (後掲の一覧表を参照されたい)。

### 3. 人物

キム・ギウンは、1900 年 9 月 21 日に朝鮮半島北部、現在の北朝鮮に位置する日本海に面した東海岸のハムゲンナンドウ (咸鏡南道), ダンチョン (端川) 郡, ガヴォン村 (漢字名不詳) に生まれた (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 5.)。1924 年まで朝鮮籍で、朝鮮半島で小学校を卒業している (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 7 об.)。1924 年にソ連国籍を取得した (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 7 об.)。

またウラジオストークにいた 1922 年に VLKSM (全連邦レーニン共産主義青年同盟, コムソモール) に加盟し、1922 年から 1925 年までコムソモール員で、加盟当初から細胞ビューロー員として働き、後には細胞ビューローの書記となった。1925 年にコムソモール組織の勧めで VKP (b) (全連邦共産党 (ボ)) に労働者として入党している (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 12.)。コムソモールには 1926 年までいた。VKP (b) では党細胞書記, プロパガンディスト, アジテーターとして働いた。コムソモール, VKP (b) では懲罰を受けたことは過去にも現在もないという。

軍隊の称号では第 25 位で予備役隊長ということである (軍隊での階級をさらに細かく区切ったものようだ。РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 12 об.)。革命前後を通じて裁判を受けたことはない。

1912 年まで朝鮮におり、1912 年に家族とともにロシアに渡った。1917 年までウラジオストーク市内の朝鮮人中等学校の学生だった。また 1915 年に約 3ヶ月間、親からの援助を受けて満州の朝鮮人学校で学び (РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13 об.)、学資がつきて再びロシアに戻った (РГА

СПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 5 об., 14.)。1917年から自分の稼いだ金で生活するようになり、1917年から1920年まで土地を借りてグロデコフスキー地区チュエンドン村で農業に従事、1921年から1922年までウラジオストークに居住した。

1918年に、約2ヶ月間、ウスリースク県ラズドリノエ駅でのホルヴァト将軍の白軍（ロシア革命後の革命政権に反対する反革命軍）の雇兵となった。彼以外の親類は白軍に従軍しなかった（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 12 об.）。白軍に従軍したことは政治的無知のためだったと後に述懐・反省している。白軍での軍務は当番監視護衛業務、厩舎の掃除、厨房での作業で、軍務に従事したのは約2年間だった。軍務から離脱できたのは、重大な軍務規律違反を彼が犯してしまったためだった。当番監視護衛業務で当直場所から出て兵舎に戻り寝てしまい、この違反で解雇されたのだという。白軍から抜け出したことについて、彼自身「大変幸運だった」としている。

1921年から1924年はウラジオストーク市内の煙草工場「レヴァント」で紙巻き煙草の煙草詰め作業工を務めた（人員削減のため解雇）。兄のキム・ギチャンも煙草工場で働いていたことから、同じ工場で兄のコネで働くようになったのかもしれない。1924年から1925年まではウラジオストーク市内の茶葉量り分け工場「カプースチン」の検量員（工場閉鎖のため失業）、1925年4月から8月まで（9月という記述もある。РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13 об.）、ウラジオストーク市内の朝鮮人協会の技術秘書（書記）として、朝鮮人のソ連市民権獲得の手続き業務に従事したが、学業への派遣のために辞職した。1925年から1929年まで労働者農民用進学予備校の学生だった。「ウラジオストークで自分と親類は農業に従事していた」という記述もあることから、ウラジオストークでの勉強や工場勤務などの活動は農業の傍ら行っていたということが想像できる。

1929年に予備校卒業後、モスクワへの派遣命令を受けてモスクワのプレハーノフ記念大学に一学期3ヶ月間在籍した後に転学する。1930年から1932年8月までモスクワのナリマーノフ記念東洋学研究所に学び、その間、日本語を習得している。1932年8月にVKP (b) 中央委員会の動員により、東洋学研究所を卒業後（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13 об.）、1932年から1939年までNKO（ソ連国防人民委員部）諜報局に派遣され勤務した。だが1939年9月に人員削減により解雇されている。

1939年10月から1942年まで外国語文献出版社（後のプロGRESS出版社）日本語編集部の翻訳者・編集者として働いた。1942年4月から1943年まで、バシュコルトスタン共和国（バシュキリア）のクシュナレンコヴォにおけるIKKI党学校の聴講生となり、同時に朝鮮語教師を務めた。そして1943年6月から1945年11月16日の時点まで、VRK（全連邦ラジオ委員会）日本語編集部に勤務している（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 2-2 об.）。キム・ギウンは1900年生まれなので、この時点での彼の年齢は45歳ということになる。この3つの組織については後述する。

父の名前はキム・タイボン、母はキム・シで、ともに農家の出で農民だった。キム・タイボンについては後述する。キム・シは1912年にキム・ギウンたちとともにロシアに移ったが、夫が2番目の妻とともに生活していたために、夫とは離れて住むようになり、朝鮮人の中央アジアへの強制移住に境に完全に夫と別れ別れになった。1942年時点の史料では、正確な住所は知らないが、カザフスタンのどこかに住んでいると述べている（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 8.）。ウズベキスタンとする史料もある（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13 об.）。

キム・ギウンの兄弟たちのうち、兄のキム・ギチャン（ギチェンと書いているものもある。年齢は50歳位）は、煙草工場で働いていた。その後カムチャッカで数年間労働者として働き、1937年に中央アジアに移った。無党派でウズベキスタン共和国内のコルホーズ員だった（カザフスタン在住という史料もある）。以下は弟たち、妹たちである。弟のキム・ギシュ（年齢不詳）、キム・ギシェン（35歳位）、キム・ギグヴォン（25歳位）はともにカザフスタン在住で、キム・ギシェンはコムソモール員で、カザフスタンの首都アルマ・アタ市の鉱業大学の教師を務めていた。キム・ギグヴォンはウシュトプスキー地区ウシュトプ村の中等学校の教師だった。キム・ギドン（年齢不詳）は無党派でNKVD（内務人民委員部）のウラジオストーク局に勤務していたが、逮捕された。釈放された後中央アジアに移住するが、中央アジアにおいて再び逮捕された（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 206.）。キム・ギユンもコムソモール員でイルクーツクの大学で学んでいた。妹たちのうち、キム・ヤガンは40歳位で、ウシュトプスキー地区ウシュトプ村の中等学校の教師だった。前述のキム・ギシェンも同じ教師であることから、同じ学校で働いていたのかもしれない。その下の妹キム・ボクスン（年齢不詳）もカザフスタンのどこかで暮らしているという（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 3-306, 8.）。兄キム・ギチャン、そして弟たち、妹たちとは連絡を取り合っておらず、彼らが何をしているのかは知らないという。

キム・ギウンの妻は、朝鮮人のツォイ・アンナで、1904年にウラジオストークに生まれた。無党派の主婦だった。1925年に朝鮮籍からソ連国籍となった（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 706.）。長女はキム・タチャナで、1925年生まれ、モスクワ外国語大学の学生だった。長男はキム・ヴラジーミル（年齢不詳）。次男はキム・アナトーリーで、1934年にモスクワで生まれている（1945年時点で11歳位）。妻の父ツォイ・ウンハク（70歳位）は、ウズベキスタン共和国の首都タシュケントに住んでおり、コルホーズで働いている農夫だという（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 8, 13.）。妻の母は1917年に死亡している。彼女の親類もウズベキスタン在住で、1940年まで逮捕歴はなかったが最近のことは知らないという。

1945年時点でキム・ギウンの国外の親類はおらず、上記の兄弟姉妹との連絡は、キム・ギウンが1929年にモスクワにやってきた時以来途絶えていた。親類（父の家族）は朝鮮にとどまっているが、連絡は何もないという。ちなみにソ連極東地方にいた朝鮮人たちは、日中戦争勃発以降の1937年に、日本のソ連侵略に利用される可能性があるとのスターリンの考えから、極東地方から中央アジア、主にカザフスタンに強制移住させられた。朝鮮人たちの強制移住によって、キム・ギウンと家族との関係がなおさらに途絶え、確かな住所さえつかめていないという（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 5, 8.）。

キム・ギウンの性格についてだが、キム・ギウンは性格的には積極的、誠実な労働者であり、政治的にも知識者といえる。自らについては言語学者、翻訳員としている（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 7.）。朝鮮語、ロシア語、日本語を習得しており、特に日本語は堪能だったという。1939年6月時点のキム・ギウンに対する勤務評定では、高等教育を受け、自らの知識を与えられた職責において活用することができる人物、規律正しく、イニシアティブがある人物、時間を気にせずに働く人物であるとされている。また同僚との関係もよく、自らの生産的活働（労働）と社会的活動への参加を結び付けていると高評価を受けている（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 20.）。

#### 4. IKKI 党学校への転任

キム・ギウンは1939年10月から1942年4月まで外国語文献出版所（後のプロGRESS出版所）日本語編集部の翻訳者・編集者として働き、管理編集員となっている（管理職か）。1940年5月22日時点に書かれた文書では、ロシア語から朝鮮語への翻訳の仕事を希望していた（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 6.）。このことからわかるように、出版所に入っただけで彼が思い通りの仕事をすることができたわけではなかった。このことは後述する戦時下の出版事情が関係するものと考えられる。だが、翻訳業務が任せられるようになると、外国語文献出版所では彼が参加して、『国家と革命』その他のレーニンの著作の朝鮮語での翻訳出版が行われた。1942年3月に、IKKIでの仕事に派遣されるために辞職した（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13 об.）。

IKKIの召喚で1942年4月から1943年まで、バシコルトスタン共和国（バシキリア）のクシュナレンコヴォにおけるIKKI党学校の聴講生となり、同時に朝鮮語教師を務めた。当時コミンテルンは、モスクワにドイツ軍が迫り、空襲が激しくなったことにより、本部機構をバシコルトスタン共和国の首都ウファ近辺に疎開させていた。クシュナレンコヴォもウファの衛星都市であった。アジベコフ他によれば、党学校（政治学校）は、1941年から1943年に機能したもので、ウファ郊外の「クシュナレンコヴォ」第1チェフニクム（中等技術学校、校長はミハイロフ）、ウファ特別学校（校長はN・チャプキン）、モスクワ郊外のナゴルヌイの「兄弟共産党予備学校」（校長はP・グリャーエフ）、クラスノゴルスクの戦争捕虜向け反ファシスト学校（学務部長はN・ヤンツェン）、そしてその他一連の戦争捕虜向け学校のことである（Адибеков и др. 1997: 224）。要するに党学校とは非合法活動・諜報活動の活動家を養成する学校だった。

このIKKI党学校にキム・ギウンを受け入れる際に、1942年2月26日付でヴィルコフとプリーシェフスキーがディミトロフに宛てて送った書簡に、キム・ギウンが外国語文献出版所からIKKI党学校へ採用された経緯が述べられている（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 16.）。文書は「我が党学校の朝鮮人グループの重大な欠点の一つは朝鮮語の知識に弱いところである」ということを指摘し、それを補う形で現在自主学習の形で朝鮮語の授業が行われており、中国共産党中央委員会に照会した結果、朝鮮語教師として2人の朝鮮人同志たちが派遣されたことを明らかにした。さらに有能な朝鮮語教師がIKKI党学校に必要であることを痛感し、管理編集員として外国語文献出版所日本語編集部勤務するキム・ギウンに白羽の矢を立てたことを述べている。キム・ギウンの状況については、モスクワの東洋学研究所を卒業し、VKP (b) 党員の朝鮮人で、朝鮮語の知識があり、そして朝鮮語で1941年に出版されたレーニンの著書『国家と革命』の編集を出版所で担当したことを高く評価し、またキム・ギウンが一度ならず朝鮮語編集部創設を提案したことを明らかにした。しかしながら出版所内の日本語を用いた仕事はかなり限定的なものにとどまっていることから、IKKI党学校朝鮮語グループでの教師にキム・ギウンを召喚することは出版所内の活動に本質的な変化をもたらすことはなく、タイムリーであると述べている。さらにはキム・ギウンが豊富な日本語の知識を持っていることを指摘した上で、彼が朝鮮人同志たちに日本語を教えるということも考えるべきとし、「200から300の日本語の単語でさえ、また日本語という言葉の言語構造の基礎的文法規則でさえ、党学校で学んでいる我々朝鮮人同志たちにとっては非常に有益なものとなるだろう。あなたの決定を乞う」と結んでいる。そしてIKKIディミトロフ書記長書記局職員タタレンコは、1942年2月28日付で

ヴィルコフに書簡を送っており、ディミトロフがキム・ギウンの受け入れを [IKKI] に提案したと記している。ただし、家族を伴わないことをウファへの派遣（つまりはクシュナレンコヴォへの派遣）の条件としている（RGASPI, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 4.）。まさにヴィルコフ、プリーシェフスキー連名のディミトロフ宛書簡の回答がタタレンコの文書だった。

前掲史料集で紹介された史料の後半部分には、「党活動と政治活動のために、我々は朝鮮人の要員を必要としている。これと関連して、我々の学校に以下の 10 名からなる朝鮮部をつくる必要がある」という記述の後に、10 人の朝鮮人の名前と簡単な略歴が付されている（RGASPI, ф. 495, оп. 74, д. 622, л. 55-56.; ВКП (б)... 2001 : 706-710; 『資料集 コミンテルンと日本共産党』2014: 425-426）。「党活動と政治活動」とは非合法活動を意味しており、また「我々の学校」とは IKKI 党学校を指している。この史料の「朝鮮人部」は 1942 年 2 月 26 日付ヴィルコフ、プリーシェフスキーの書簡の「朝鮮人グループ」のことを指しているのだろう。このことから、「朝鮮人部」の養成、補強がキムギウンを招聘した理由だった。

上記の文書からわかることは、外国語文献出版所では朝鮮語編集部は独立した形ではまだ存在しておらず、日本語編集部の中に朝鮮語スタッフがいて働いていたということだ。また第二次世界大戦の大祖国戦争の時期にあたり、日本語文献出版活動と朝鮮語文献出版活動の二つが開店休業状態だったことがわかる。ちなみにこのような状況は日本語文献と朝鮮語文献に限ったことではなかったようだ。第二次世界大戦以降、社会運動において紙のメディア（機関紙誌、パンフレット、リーフレット、ビラなどの印刷物、図書などの出版活動から無線通信（音声無線、無線電信を含む）による情報伝達、さらには音声メディア（ラジオ放送）への移行が見られた。第二次世界大戦、特に大祖国戦争が勃発すると、運動の根幹となるカネ・ヒト・モノの移動、情報の伝達、特に紙のメディアによる情報伝達が困難になったからである（島田顕 2017b）。キム・ギウンは閑職から有意義な活動を行う現場に職場復帰することになったが、このことは世界の社会運動の流れに沿っているのである。

さらにキム・ギウンが朝鮮語教師と日本語教師を兼務していたことにも意味がある。キム・ギウンの IKKI 党学校教師就任は、朝鮮人学生向けの朝鮮語・日本語授業のためであり、つまりは日本の植民地下にあった朝鮮半島、日本の傀儡国家だった満州帝国治下の中国東北部の満州、そして樺太や朝鮮労働者が強制徴用されていた日本国内各地へと派遣される非合法活動家・地下活動家の養成のためだった。加えて聴講生を兼ねていたことは、キム・ギウン自身も、いずれ非合法活動に身を投じることを決心していたのではないだろうか。「家族を伴わない」という条件は、任務が特殊のものであることを示しているといえよう。

## 5. 日本語編集部への採用の意味

1943 年 6 月からキム・ギウンはモスクワ放送日本語編集部のスタッフの一人となった。文書では経歴のみで、モスクワ放送での彼の活動を知ることができる記述は見られない。これまでルガスビにあったムヘンシャン、東一夫など、モスクワ放送に勤務した人物の文書を見てきたが、各人の放送局での仕事の内容について、文書から知ることはできなかった。キム・ギウンもこの例にもれないであろう。

モスクワ放送の日本語編集部にキム・ギウンのような朝鮮人職員と、一見奇妙な取り合わせのよう

に思われる。なぜキム・ギウンは日本語編集部に採用されたのか。まず日本語が堪能なことが挙げられるが、それは大前提である。それなくしては翻訳者としての採用は考えられないからだ。さらなる理由として次のようなことが考えられる。すなわち、日本語番組の放送のためには、ロシア語の原稿を日本語原稿に翻訳することが必要であるが、この作業に第三国出身者を加えることによって、翻訳の客観性が高まることを狙ったのではないだろうか。日本人翻訳者だけでは、翻訳の信頼性がなかったためだろう。朝鮮人職員はソ連国籍であり、ソ連国家に忠誠を誓っていたのに対し、日本人職員は日本国籍のままであった。キム・ギウンについても同じ事情である。もっとも、モスクワに滞在していた各国共産党の代表たちは、在外代表部（ザグランビューロー）の一員（在外代表）という立場だったから、多くの者たちが国籍も党籍もそのままにしていた。めったなことがない限り、ソ連国籍、VKP (b) 党籍になることはなかった。在外代表としての資格が失われてしまうからである。二重党籍もあり得なかった。

時期は異なるが、モスクワ放送日本語編集部にはこれまで何人かの朝鮮人職員が勤務していた。モスクワ放送局の日本語編集部スタッフとしてかつて勤務していた朝鮮人の中で、最も有名な人物はヴィクトル・マカレーヴィッチ・キムである。ヴィクトル・キムは、モスクワ放送を辞めた後、通訳として活躍した。まさにゴルバチョフ時代を代表する最も優秀な通訳の一人だった。また戦後からはじまったハバロフスク局からの日本語編集部には、カン、キム・インボン、キム・ミネという朝鮮人も働いていた。これら朝鮮人はロシア語から日本語への翻訳担当として採用された。キム・ギウンもまさにそうではないだろうか。そしてそれら朝鮮人翻訳者の作業は日本人翻訳者と全く同様である。労農赤軍における政治委員（コミッサール）のようなものといえるのかもしれない。ちなみに他の言語の編集部にはこのような例は見られない。

1941年12月16日時点の文書ではキム・ギウンの名前が挙げられているのに、日本語編集部への採用は1943年6月からとなっている。つまり1941年12月16日以降、1943年6月までキム・ギウンは採用されず、1942年4月の日本語番組の放送開始時にはいなかったことがわかる。一旦名前が挙げられているのに、その時点では採用されなかった理由として、1942年4月に採用となる前職であるクシュナレンコヴォにおけるIKKI党学校教師兼聴講生の仕事がまず優先され、そしてクシュナレンコヴォから転出ができなかったことが考えられる。前述したようにIKKI本部機構はウファに疎開していたが、モスクワへの直接の脅威がなくなると徐々にモスクワに戻るようになった。当時のスペイン共産党最高指導者ドロレス・イバルリも、1941年10月16日にコミンテルン指導部と一緒にウファに移動し、1943年2月にモスクワに戻っている（Ибаррури 1988: 68）。要するにキム・ギウンのモスクワへの帰還が遅れたということだ。ちなみに片山やすも東洋学研究所とともにウズベキスタンのフェルガナにいたために、モスクワへの帰還が遅れ、前掲史料集の史料ではアナウンサーとされていたが、日本語番組の最初のアナウンサーはムヘンシャンが務めることになった。このことと同様の事情であろう（島田顕 2016d）。

もう一つ考えられるのは、キム・ギウンの諜報活動とラジオ・プロパガンダ活動の兼務である。疎開先からモスクワにコミンテルン本部機構が帰還することによって、キム・ギウン自身も帰ることになったが、IKKI党学校教師兼聴講生の立場はそのまま、モスクワ放送日本語番組の仕事を兼務することになったのではないだろうか。モスクワに本人もIKKI機構も帰還することによって二つの業



務の兼務は十分可能になった。兼務とする根拠は、キム・ギウンの文書には、これまでの経歴については必ず異動の理由が書かれていたのに対して、IKKI 党学校を辞めたという記述がないことである。ラジオ放送局への採用理由の記述もない。IKKI 党学校も放送局も IKKI の管理下にあったから辞めたとは見なされなかったのかもしれない。諜報活動もラジオ・プロパガンダ活動も戦時下の状況ではどちらも重要なものだったために、そのまま継続ということは十分考えられる。

キム・ギウンが日本語編集部のスタッフになった理由は、日本語編集部のスタッフが不足していたことだろう。キム・ギウンを除けば、野坂龍、片山やすとムヘンシャンだけだった。朝鮮人であるキム・ギウンが日本語編集部に勤務するメリットは、日本語編集部で日本語の実戦経験を積み重ねることができ、それによって日本語のさらなる上達が可能となることである。言語技能の向上が常に求められているからこそその配慮であろう。

キム・ギウンの個人ファイル文書により、1945 年時点でキム・ギウンがモスクワ放送の日本語編集部勤務していたことが明らかになった。だが、1944 年 11 月にハバロフスクで行われた日本語番組に対するモニタリング調査の結果をまとめた文書では、キム・ギウンの名前は出ていなかった（島田顕 2017a: 211-224）。名前は挙がっていないが、翻訳作業は野坂龍だけがやっていたのではなく、野坂龍のもとに複数の翻訳者を擁する「編集機構」があったことは間違いない。つまり当時の翻訳作業での分担で、下訳をするのがキム・ギウンや片山やすを含む「編集機構」のスタッフで、それをチェックするのが翻訳の責任者である野坂龍だった。「ラジオ番組の中にある個々の過ち、日本語への翻訳の不正確さは、編集機構の注意深さが欠けている。[中略] キムシャン同志は、他の若干の養成を経た翻訳者の翻訳の編集を行っている」とのプーズィン（ソ連人民委員会議附属ラジオ普及・ラジオ放送委員会議長）の記述がこのことを示している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57.）。その中にキム・ギウンが含まれていたのだろう。片山やすもその一人だった。名前が挙がっていないのは、プーズィンがムヘンシャンをエスケープゴードにし、野坂龍、片山やすを高く評価するためであり、野坂への責任追及を回避することを意図していたためだった。キム・ギウンの放送局での活動は矮小化されてしまったといえる。

## 6. 父、兄の逮捕・粛清

様々な経歴を持っているキム・ギウンだが、彼の唯一の汚点といえるのが父の逮捕である。キム・ギウンの父キム・タイボンは、1870 年頃の生まれ（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 13.）であるから、1945 年時点では 75 歳位ということになる（1942 年時点の史料で 70 歳位とされていた。РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 8.）。1905 年に家族を朝鮮に残し単身でロシアに渡り、ウラジオストークに移り住み、平屋の家を所有していた（РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 14.）。ウラジオストークで別の女性と結婚し（重婚か）、キム・ギウンたち元の家族とは別に家族をもち、定職に就かず生活していた。1920 年までウラジオストークのノヴォ・カレイスカヤ自由農民村の平屋の家に住み、1920 年に家族とともにスチャンスキー地区ペシュドン村に移り住み、1937 年まで農業に従事する農民だった（1920 年からウラジオストーク管区グロデコフスキー地区チュエンドン村、ペシュドン村とする史料もあるし、スチャン地区とするものもある。РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 2 об, 13, 14 и др.）。1937 年に、朝鮮人の極東地方からの強制移住の前に NKVD 機関によって連

捕された。

父キム・タイボンが1937年に逮捕されたことについて、別の史料がないか調査したところ、ロシアにおける朝鮮人粛清研究者であるスベトラナ・ク・デガイ他が編んだ『ソ連における政治的粛清者の朝鮮人犠牲者 1934年—1938年』の第3巻に、キム・ターボンという人物の略歴があることがわかった。そこには次のように書かれている。「キム・ターボン、1878年生まれ、ハムゲンナンドウ(咸鏡南道)、ダンチョン(端川)郡、ガヴォン村出身、ソ連市民、文盲、極東地方ウスリースク州ウラジオストーク市居住、定職なし。1937年8月3日に次の罪状(以下引用)で逮捕された。『日本の偵察組織によって作られた反革命スパイ組織参加者に対し援助し彼らを匿った』。内務人民委員部極東地方局三人委員会によって1937年9月2日に極刑=死刑判決が下された。処刑は1937年9月9日にウラジオストーク市で執行された。1958年2月14日に太平洋艦隊軍事法廷[軍法会議]により名誉回復された」(Ку - Дегай и др. книга третья 2004: 118)。多少の記述のずれはあるかもしれないが(名前がキム・ターボンであること、その他)、まさにキム・タイボンを指しているといえるだろう。ちなみにク・デガイの一連のシリーズ本で、キム・ギウン本人、弟のキム・ギドンとさらにその下の弟キム・ギユンの記述も探したのだが、記述はなかった。ということは、本人と弟たちは処刑されなかったということも考えられる。少なくとも戦前は粛清されなかったことは間違いない。

父と弟の逮捕・粛清がキム・ギウン本人の運命にも少なからず影響を与えたことは大いに考えられるだろう。外国語文献出版所に勤務していた1940年7月9日に、本人による外国語文献出版所人事部宛ての弁明書がこのことを物語っている。「朝鮮人の極東地方からの強制移住の後、一部の親戚の情報を何も持っていない。だから現在まで多かれ少なかれ、正確な情報をお伝えすることができなかった。1940年7月6日に、かつてウラジオストークに住んでいて、現在はクズィールオルダ[カザフスタン共和国クズィールオルダ州の州都]に在住のキム・ベンウン、ツォイ・デュリンに会って、彼らに自分の親戚の居所を尋ねたが、詳しいことはわからず、以下の情報を得るのみだった。すなわち、父が強制移住の前に逮捕されたようだ。父の次に弟のキム・ギドンが、強制移住の前にウラジオストークで逮捕された。さらにその下の弟キム・ギユンも逮捕された」(РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л. 10.)。新たに得た情報をもとにキム・ギウンは、アンケート、履歴書に修正を加えることを要請している。まるで、逮捕された父、兄弟たちとは無関係であることを強調しているかのような文章である。縁を切ったも同然と言わんばかりである。逮捕されるような容疑は自分には全くないし、自分は潔白だと言おうとしているようだ。まさに、兄弟姉妹や家族をも切り捨てなければ自分を守ることができなかった時代を語ったものといえるだろう。このような弁明書を書くこと自体、キム・ギウンに何らかの疑いがかけられていたことを表している。だが戦争中ということもあり、処分はなされなかったようだ。

しかしながら、キム・ギウンが戦後に粛清されたという可能性も捨てきれない。戦中は鳴りを潜めていた粛清の嵐が戦後に再び息を吹き返しているからだ。戦後の粛清は1953年のスターリンの死去まで続く。ク・デガイの前掲書はあくまでも1934年から1938年の大粛清期のソ連における政治的粛清者の朝鮮人犠牲者を扱ったものである。このことから、ク・デガイが把握していない戦後の粛清も考えられる。キム・ギウンの状況はムヘンシャンの状況と極めて酷似している。ムヘンシャンは岡田嘉子をモスクワ放送日本語番組のアナウンサーに引き入れた後に姿を消している。一方キム・ギウ

ンについては、文書に1945年以降の記述がない。戦後に姿を消しているといっても同然の状況である。戦後に粛清されたとなると、父の逮捕・処刑、さらに弟の逮捕によって嫌疑をかけられたことはありえないことではない。加えて白軍への参加もある。

## 7. おわりに

キム・ギウンとは実に謎多き人物である。過去には様々な経歴を経てきた人物であり、苦労を重ねてきた。しかも独力で、自分の生計を立て生活してきた努力家といえる。半面無学ではなく、大学（東洋学研究所）を卒業しているエリート、有識者である。たたき上げの実務経験を持っているだけでなく、有能で語学が堪能である。朝鮮語、ロシア語、日本語は流暢であったとされている。他方で積極性、誠実さ、正義感があり、規律正しく、社交的な人物だった。

このように高く評価されている人物が戦後どうなったのか知りたくなるのは当然のことであるが、史料は今のところ見つかっていない。残念ながら彼が戦後に粛清された可能性は決して低くはない。粛清でなければ、朝鮮半島、中国での非合法活動へ身を投じた可能性もあるだろう。いずれにせよ無駄死にさせるには本当に惜しい人物といえよう。だが、このように無駄死にとなった有能な人物が数多くいたことも否めない事実である。彼が思い通りの人生を全うしたことを願うばかりである。奇しくも彼の動きは世界の社会運動の流れに沿っているのである。

最後に今後の課題について述べたい。今回、ルガスピのキム・ギウンの個人ファイル史料のみを用いた。史料的に限られたものしか使用できなかった。キム・ギウンをさらに追いかけるならば、極東での活動、特にコムソモールでの役割、朝鮮人社会や朝鮮共産党との関連、東洋学研究所での学業の状況、NKOでの活動、外国語文献出版所での出版活動、さらにはIKKI内での動き、特にIKKI党学校での教育活動も見ることがある。これらのうちさしあたり可能性があるのはIKKIとIKKI党学校での活動、そして東洋学研究所での学業状況だ。IKKI関連はやはりルガスピで調査するしかない。東洋学研究所関連のものは、東洋学研究所内にあるのかどうかかわからないが、問い合わせることは可能である。一方、NKOのものは絶望的状况で、アクセスすらできないだろう。また極東での動きを知るためには、ウラジオストクの文書館での調査も必要となるだろう。放送局の仕事については、GARF（ロシア国立連邦文書館）のラジオ放送局関連史料を見れば、さらに何かつかめるかもしれない。加えて放送局関連では、1945年の解放後に開始されたモスクワ放送の朝鮮語番組の放送（Кретов 2009: 158-159）についても知る必要がある。例えば、前掲史料集で名前が挙げられていた10人については、朝鮮語番組と関連があるのかどうかを確かめなければならない。朝鮮人個人ファイル史料で調べる価値も十分あるだろう。日本人との関連でもあたる必要がある。未だにつかめていないミの追跡調査も不可欠だ。ミは前掲の『ディミトロフ日記』の註解によれば、朝鮮共産党幹部、IKKIプレス・ラジオ放送部職員とされている（Димитров 1997: 724; *Kommentare und Materialien zu den Tagebüchern* 2000: 559）。また1942年1月23日にディミトロフに面会している。このことをディミトロフは日記に、「朝鮮で活動準備を行う我が学校 [IKKI党学校] (クシュナレンコヴォ) を訪問する朝鮮人共産主義者 (キムとミ) と話す」と記している（Димитров 1997: 274; *Dimitroff* 2000: 477）。だが記述はこれのみである。いずれにせよ、まだ調査しなければならないことがたくさんある。これらの調査をしつくした結果、キム・ギウンを含め、モスクワ放送の日本語番組と朝鮮語番組

の歴史を幅広くとらえなおす必要があるだろう。

## 史料（キム・ギウン個人ファイル文書のみ）

- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.1.: [個人ファイルの表紙, 情報なし]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.2-2 об.: Справка. [題名は「略歴」, 印刷された用紙にタイプ打ち, 書き手は人事セクション副部長 D・ニコラエフ, ニコラエフの署名あり, 日付は 1945 年 11 月 16 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.3-3 об.: Секрправка. [題名は「略歴」, タイプ打ち, 書き手はキム・ギウン本人, グリャーエフの署名欄あるが署名なし, л. 11, 11 об. と同じ文書である, 日付は 1945 年 7 月 4 日, 日付の記入はないが л. 11, 11 об. に日付があるためにこちらも 4 日とした]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.4.: Отдел кадров ИККИ—т. Вилкову. [題名は「ИККИ 人事部, 同志ヴィルコフ宛」, タイプ打ち, 書き手はディミトロフ書記長書記局員タタレンコ, タタレンコの署名あり, 日付は 1942 年 2 月 28 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.5,5 об.,6,6 об.: Анкетный Лист. [題名は「アンケート用紙」, 印刷された用紙にタイプ打ち, 形状は履歴書, 2.5×3 cm の写真付き, 書き手はキム・ギウン本人, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人に M・スミルノヴァの署名あり, 日付なし]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.7,7 об.,8,8 об.: Анкетный Лист. [題名は「アンケート用紙」, 印刷された用紙にタイプ打ち, 形状は履歴書, 写真なし, 書き手はキム・ギウン本人, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人に M・スミルノヴァの署名あり, 日付は 1940 年 5 月 22 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.9.: Служебная характеристика на старшего референта 7-го Управления РККА. КИМ ГИ - УН. [題名は「労農赤軍第 7 局上級調査員, キム・ギウンに対する勤務評定」, タイプ打ち, 書き手は部長・大隊付き政治委員ムハ, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人に M・スミルノヴァの署名あり, 日付は 1939 年 6 月 5 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.10.: В Отдел кадров Изд - ва от сотрудника КИМ ГИ - УН. Заявление. [題名は「職員のキム・ギウンより出版所人事部あて, 弁明書」, タイプ打ち, 書き手・差出人はキム・ギウン本人, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人に M・スミルノヴァの署名あり, 日付は 1940 年 7 月 6 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.11,11 об.: Справка. КИМ ГИ - УН. [題名は「略歴」, タイプ打ち, 書き手はキム・ギウン本人, グリャーエフのところ別名の署名あり [判読できず], 日付は 1945 年 7 月 4 日, л. 3,3 об. と同じ文書 (コピーか) である]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.12,12 об.,13,13 об.: Личный листок по учету кадров. [題名は「人事登録に関する個人用紙」, 印刷された用紙にタイプ打ち, 形状は履歴書, 写真なし, 書き手はキム・ギウン本人, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人にグリャーエフの署名あり, 日付は 1942 年 11 月 30 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.14,15.: Автобиография. [題名は「自伝・履歴書」, 印刷された用紙にタイプ打ち, 書き手はキム・ギウン本人, 「コピーは原本に相違ない」という部分の保証人にグリャーエフの署名あり, 日付は 1942 年 12 月 1 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.16.: Тов Димитрову Г. М. [題名は「G・M・ディミトロフ同志宛」, タイプ打ち, 書き手・差出人はヴィルコフとブリュシエフスキー, ヴィルコフとブリュシエフスキーの署名欄があるが署名なし, 日付は 1942 年 2 月 26 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.17-18.: Справка. КИМ ГИ - УН. [題名は「略歴」, タイプ打ち, 書き手はヴィルコフとブリュシエフスキー, ヴィルコフとブリュシエフスキーの署名欄があるが署名なし, 日付は 1944 年 2 月 26 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.19-20.: Справка. КИМ ГИ - УН. [題名は「略歴」, タイプ打ち, 書き手は M・スミルノヴァ, M・スミルノヴァの署名あり, 日付は 1939 年 6 月 9 日]
- РГАСПИ, ф. 495, оп. 228, д. 590, л.21,21 об.: Автобиография. [題名はなし, 手書き, 書き手はキム・ギウン本人, 別名の署名あり [判読不能], 日付は 1942 年 12 月 1 日, 文書は後半部分のみであり, 前半部分はない]

## 参考文献

- 岡田嘉子『心に残る人びと』早川書房, 1983 年。
- 岡田嘉子『ルバーシカを着て生まれてきた私』婦人画報社, 1986 年。
- 岡田嘉子『悔いなき命を』日本図書センター, 1999 年。
- 片山やす他『わたしの歩んだ道 父片山潜の思い出とともに』(エリザヴェータ・ジワニードワ編, 小山内道子編訳, 成文社, 2009 年)。
- 工藤正治『岡田嘉子 終わりのなき冬の旅』双葉社, 1972 年。
- 『コミンテルン小史』(ソ連科学アカデミー編, 高山林太郎訳, 刀江書房, 1969 年)。
- 『コミンテルンの歴史』(ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編, 村田陽一訳, 下巻, 大月書店, 1973 年)。
- 島田顕「ムヘンション＝モスクワ放送最初の日本人アナウンサーの軌跡」『早稲田大学アジア太平洋研究』第 14 号, 2010 年 3 月, 121-135 頁。

- 島田顕「ムヘンジャン：モスクワ放送最初の日本人アナウンサー」『The・ART・TIMES』No. 8, October, 2011, 51-52 頁。
- 島田顕「日露駆けた『無辺者』追う, ◇『モスクワ放送』最初の日本人アナ, 波乱の足取り◇」『日本経済新聞』2012年2月9日, 朝刊40面 [文化面]。
- 島田顕「コミンテルンのラジオ放送」『日口交流』第246号(通巻377号), 2015年9月1日, 3頁。
- 島田顕(2016a)「大祖国戦争勃発直後のコミンテルンのラジオ・プロパガンダ強化策」『Intelligence』第16号, 2016年3月31日, 84-92頁。
- 島田顕(2016b)「モスクワ放送局日本語放送の先駆—延安新華広播電台」『日口交流』第253号(通巻384号), 2016年4月1日, 4頁。
- 島田顕(2016c)「コミンテルンのラジオ放送・その二」『日口交流』第257号(通巻388号), 2016年9月1日, 4頁。
- 島田顕(2016d)「第二次世界大戦中のモスクワ放送—モスクワからの日本語放送はいかにして開始されたのか—」『早稲田大学アジア太平洋討究』第27号, 2016年10月, 125-134頁。
- 島田顕(2017a)「開始当初のモスクワ放送日本語番組—放送内容と批判」『早稲田大学アジア太平洋討究』第28号, 2017年3月, 211-224頁。
- 島田顕(2017b)「ラジオ・ピレナイカ(独立スペイン放送—コミンテルンが開始した秘密ラジオ放送)」『Intelligence』第17号, 2017年3月31日, 151-163頁。
- 島田顕(2017c)「キム・ギウンについて」『日口交流』第265号(通巻396号), 2017年5月1日, 4頁。
- 平澤是曠『越境—岡田嘉子・杉本良吉のダスヴィターニャ』北海道新聞社, 2000年。
- ルート・フォン・マイエンブルク『ホテル・ルックス—ある現代史の舞台』(大島かおり訳), 晶文社, 1985年。
- ケヴィン・マグダーマット, ジェレミ・アグニュー『コミンテルン史—レーニンからスターリンへ』(萩原直訳), 大月書店, 1988年。
- 升本喜年『女優 岡田嘉子』文芸春秋, 1993年。
- リップマン・レーヴィン「モスクワのラジオ放送局で」『月刊はちのへ情報 アミューズ AMUSE』(坂本市郎訳), 1997年2月号, 70-71頁。
- Г. М. Адибеков, Э. Н. Шахназарова, К. К. Шириня, *Организационная структура Коминтерна 1919-1943*, М., 1997.
- ВКП (б), *Коминтерн и Япония 1917-1941*, М., 2001. (日本語版:『資料集 コミンテルンと日本共産党』(和田春樹/G・M・アジアベークフ監修, 富田武/和田春樹編訳), 岩波書店, 2014年)
- Е. Диванидова, *Дочь японского революционера*, М., 2011.
- Георги Димитров, *Дневник (9 март 1933-6 февруари 1949)*, София, 1997.
- Georgi Dimitroff, *Tagebuecher 1933-1943*, Herausgegeben von Bernhard H. Bayerlein und Wladislaw Hedeker unter Mitarbeit von Birgit Schliwenz und Maria Matschuk, Berlin, 2000.
- Долорес Ибаррури, *Воспоминания борьба и жизнь в двух книгах, книга 2 1939-1977, Мне не хватало Испании*, М., 1988.
- Валентина Злобина, «Московское радио» в годы Великой Отечественной Войны, в кн. *Голос, который знаком всему миру, Российскому Иновещанию—80 лет!*, М., 2009, с. 37-43.
- Kommentare und Materialien zu den Tagebüchern 1933-1943*, Herausgegeben von Bernhard H. Bayerlein und Wladislaw Hedeker unter Mitarbeit von Birgit Schliwenz und Maria Matschuk, Berlin, 2000.
- Ку - Дегай Светрана, Ли Хен Кын, *Корейцы жертвы политических репрессии в СССР 1934-1938*, книга третья, М., 2004, с. 118.
- Михаил Кретов, Ёгинун Москваимнида! По - корейски это значит «Говорит Москва!», в кн. *Голос, который знаком всему миру, Российскому Иновещанию—80 лет!*, М., 2009, 158-159
- И. Симанчук, *Голос России, Документально - публицистическое повествование*, М., 2004.